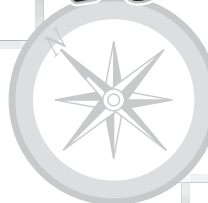


先日、塩釜市杉村惇美術館の対話型鑑賞プログラム「アートの見方は無限大！ 鑑賞のじかん」(チルドレンズ・アート・ミュージアムしおがま主催)に参加した。一枚の絵を数分かけて眺めてから、気付いたことを自由に語り合う。何かと言葉になって発せられることで、その何か別の誰かの新しい気付きにつながる。20分ほどの緩やかな言葉のラリーを経て、初めて見るその絵に親しみを抱き始めた自分に気付く。初対面同士で気軽に語り合うこの感覚は、長めのフライトで隣の乗客と交わすおしゃべりに少し似ている。くしくもプログラムを進行する係の「ナビゲーター」と呼ぶそうだ。

一般的に、人気の企画展を自当てる美術館に行くと、鑑賞速度を人の流れに合わせないといけないことが多い。それほど混んでいない展示でも、「全部見なくては」と思うとどうしても足早になる。

座標



また、作品を見るよりも、キャプションの説明を読むことの方に正しい気を取られてしまう。だから大抵、展示を見ることはかなり疲れることとなる。

しかし、ナビゲーターの一人で、2018年から対話型鑑賞に関わってきた坂爪奈央子さんは「対話型鑑賞の後、頭の中をマッサージされたような感覚になります」という。確かに、時間を取って、自分の間合いで言葉を発してよいという共通理解のおかげで、絵のことだけを丁寧に考えていられて、心の凝りがほぐれたように感じたし、この場で自分は尊重され

他者の声 尊重し合う場

ているという実感があつた。絵についての専門知識がなくても、描かれている色や形について、感じたことを何でも聴いてもらえるという実感である。

ところで、勤め先の大学1年次の導入科目「基礎演習」(自分で考え、言葉を交わし、調べ、意見をレポートにまとめるための基礎スキル習得のための科目)で、私は、3年ほど前から「国連子ども権利条約」の第12条「意見を表す権利」(意見表明権)を参照している。「子どもに関するあらゆる事柄について、子どもが意見を表明」できるためには、子どもが頑張るのではなく「聴く側」すなわち大人の方の工夫がまず求められると、子どもの権利条約の専門家である工学院大の安部芳絵教授は述べている。

耳を傾けてくれる他者がいてはじめて、当事者は自分の声や言葉を肯定しはじめる。このことは、他人の意見の引き写しでなく自分

対話型美術鑑賞

の言葉を持つことを求められる、大学での学びにとっても重要と思う。権威に媚びない、借り物でない言葉を待ってもらえる安心感の大切さは、対話型鑑賞のコンセプトにも通底している気がする。

主催側では今後も、対話型鑑賞を杉村惇美術館などで定期的に行っていくそう、ナビゲーター同士の勉強会を定期的に行っているという。あのアジール(避難所)のようなひとときを創出するナビゲーターの皆さんもまた、互いに尊重し合い声を聴き合っていることが察せられ、さらに心温まる思いがした。

宮城学院女子大准教授

間瀬 幸江

(仙台市)